

親子の相互作用に関する研究と その方法論の問題

乾 原 正

I はじめに

パーソナリティの形成過程における初期経験の重要性に多くの研究者たちが注目し、その影響を実証的に検討する研究が始められてまださほどの年月が経っていない。初期経験に関心をもたれるようになったのは、次のようなさまざまな領域からの刺激を背景にしていると考えられている。^{1), 2)}

第一は、精神分析学における性格形成理論の影響である。Freud が彼の臨床的経験に基づき、リビドーの重要な発達段階は5～6歳にほぼ終るが、それまでの口唇期（～1歳）、肛門期（1～3歳）および前性器期（4～6歳）の各段階において、リビドーの充足が阻止されるとリビドーは固着し、そのパーソナリティは後に同種の欲求不満場面に遭遇したとき、先の固着段階に退行し、神経症などの不適応行動を示す源泉となることを論じた。パーソナリティの発達についての精神分析理論は子どもの「しつけ」に変革をもたらし、³⁾ また Freud を物理学におけるニュートン同様、思想上不変の地位を与え、⁴⁾ その名を知らない者がいないほど西欧文化に大きな衝撃を与えた。しかし、臨床観察に基づく理論の検証は困難で、以後さまざまな論議を喚起してきたことはすでに周知の通りである。

第二は、Lorenz や Harlow などの動物の行動で指摘された初期行動の問題である。

オーストリアの動物学者 Lorenz が早熟性のひな鳥を孵化直後の一定時間内に仮親（生物でも無生物でも）につけると、これらのひなはその後一生仮親を親とし

て追従し、自己の種族には無関心を示すという、刻印づけ (imprinting) の現象が生ずることを発見した。こゝには、臨界期と不可逆性の問題も包含され以後多くの実験的研究が加えられるようになった。⁵⁾ Hess がカモとニワトリのひなを用いて、追従反応の刻印づけの臨界期が、孵化後 13~16 時間の間に存在することや孵化前の雌鳥との盛んな交信が孵化後の親子関係を確立するのに大変有効であるという見解を示した。⁶⁾ このような初期行動や臨界期の発見が人間の行動発達を考えるうえでも有効であるとして注目されたのは 1950 年代のことであり、臨界期の発見によって、Freud のいう幼児体験が、新しい光に照らし出されたといわれる。⁷⁾

第三の背景は、Hebb らによる初期環境の効果に関する実験研究である。Hebb は発達初期における環境条件によって、行動を媒介する細胞集集体 (cell assembly) や位相連鎖 (phase sequence) の形成に差異が生じ、その後の適応行動に重大な影響を及ぼすということを主張している。⁸⁾

第四の刺激は、スイスの生物学者の Portmann によって与えられたものである。彼は人間誕生時の状態を他の動物と比較し、人間はすべて生理的早産であり、少なくとも生後一年は胎外胎児として本来胎内で完成されるべき機能を発達させる時期であるとしている。⁹⁾ このことは人間の誕生後はまったく無能で未熟である反面、生後の環境条件によって可変性に富んだ行動をとりうるということができるといふ積極的な意義をもつものであることを示唆している。

以上の諸見解は、児童心理学や発達心理学の研究者たちのみならず、広く一般にも乳幼児の研究促進に強い刺激を与えた。しかも従来の児童や発達の研究が記述的レベルでしかなかったのに対し、今日の研究の多くは説明的レベルを旨とするものと変化してきている。説明的とは、先行変数と後続変数との関係を明確に分析することであり、具体的には、現在の行動を理解するために過去を回顧するか、あるいは現在の行動が将来の行動にどのように関係するかの予測の問題を含むものである。このように考えると、ことは単に児童や発達の領域の問題ではなく、人間の本質にかゝり、心理学や教育の根本に及ぶ重要な問題であるといわねば

ならない。

そこで本研究は、こうした状況のもとで急速にすゝめられてきた親子の相互作用に関する組織的研究をとり上げ、特にその方法論的諸問題を Lytton のレビューをもとに検討を加えようとしたものである。

II 従来の親子関係研究の問題

ところで、人間の初期経験に関する問題の多くは、必然的に親子、特に母親の行動や態度との関係で理解されねばならない。前述のひな鳥の刻印づけも、人間の乳児の場合には、母親に対する心理的な愛着・依存を示す行動にかゝわるものとして理解されている。哺乳類や鳥類の愛着行動を詳細に調べた Bowlby は「人間の赤ん坊における愛着行動の発達過程は、他の哺乳類や鳥類における刻印づけ（広義に解釈された場合）と名づけられる行動の発達過程と、かなり類似している」と結論づけている。¹⁰⁾ 従って、初期経験の問題は母子の相互関係において把握されるべき性質を多く含むものである。

母子関係が子どものパーソナリティ形成に重要な役割をもつという認識は、20世紀のはじめからホスピタリズムの問題として、また情緒障害や問題行動と関連して、Bowlby, Gesell, Goldfarb, Spitz らをはじめとする臨床的立場の研究者たちによる研究を通して指摘されてきた。¹¹⁾ しかし、多数の変数が複雑に存在している親子の問題を母親分離 (maternal separation) や母性的養育の喪失 (maternal deprivation) という大まかな単一の変数のみでとらえ、問題行動の原因とするには無理があり、一般の親子関係を解明するものとはいいい難いものであった。

また、精神分析理論の観点から出発し、その後行動理論の立場にある人たち（例えば Sears ら）からも討究された養育行動 (mothering) 一授乳、排尿排便、身体的接触、愛撫などを先行変数とした多くの研究も一義的な結論を引き出すことができなかった。この種の研究に対しては次のような問題点が指摘されている。

その第一の指摘は、親子関係の概念に関する問題である。かつての研究は、「母

親の態度・行動→子どもの反応 という見方から 環境の側の変数は独立変数として絶対的地位を確保していたといえよう。あたかもそれは、環境からの刺激はすべて、子どもに刺激として有効性をもつという信念によってさらに武装されていた観すらある。そのために、母子間の力動的な様相の把握を一面的なものにし環境刺激の持ち味を半減させてしまっていたわけである」という。¹²⁾ 確かに、三宅の述べる「子どもと母親との間にどのような相互交渉関係が存在するかということが、乳児期における子どもの発達に関する重要な問題である」という¹³⁾ ことからすれば、それに則した状態や方法で把握しなければ研究の意義を無くしてしまうだろう。

第二の問題は、多くの研究で用いられている変数の概念が必ずしも明確でなく、研究者相互間の理解を減じているという指摘である。依存性・過保護・攻撃性など高度に抽象された場合、その状態や特性を取扱っているかどうかを最初に確認するのでもなければ無意味である。多数の研究が多様な結果を示し、明確で一義的な考察が不可能で、研究モデルが確立できないという理由も概念の明確さに欠ける結果であるとするものである。¹⁴⁾

さらに第三の指摘として、方法論上の欠点があげられる。Caldwell の報告をもとにして、三宅は、養育行動に関する「ほとんどの研究が逆向的な方法によって資料を収集したものであり、このような研究においては、得られた資料にどの程度の信頼をおくことができるか問題であるし、また二つの異なった時点における測定の間直接的な因果関係を想定することにも大きな疑問がある」としている。¹⁵⁾

こうした批判や反省とともに、動物の初期経験や初期行動の研究にも強く鼓舞され、第二次世界大戦後から親子関係に関する組織的な実証研究が次第に報告されるようになってきた。

III 親子の相互作用に関する組織的研究

親子関係の研究に組織的観察を用いた最初のものは、Baldwin, Kalhorn およ

び Breese によって1945年に報告された Fels study である。¹⁶⁾ Lytton によれば「この時から科学的な親子の相互作用に関する研究が始った」ということになる。そして彼は、この研究を含め1970年までに公刊された50の研究についての分析をまとめ、1971年に報告している。¹⁷⁾

Lytton は、まず親子の相互作用に関する研究の方法を次のように分類している。

- a 親または青年に対する質問紙
- b 親の面接
- c 実験室での構成された相互作用の観察
- d 実験室での構成されない相互作用の観察
- e 家庭での自然に即した観察

このうちc・d・eに属する研究すなわち観察法を用いた研究を対象にしている。ただし、母性的養育の喪失におけるような子どもの行動に中心をおいた研究や精神分裂病の家族における相互作用に関するものは含まれていない。また、数種の出版物で考察されているが、もとの資料が同一の場合は1つの研究として数えられている(Baldwin らの1945と1949, Barker と Wright の1955と1963, Caldwell らの1964と1969, Brody の1965と1969, Gewirtz と Gewirtz の1965と1969, Moss の1965と1967, Kogan と Wimberger の1966と1969および Moss らの1968と1969)。

このように質問紙や面接による研究は直接には対象とされていないが、観察と併用している研究が含まれており、質問紙や面接に関する問題からとりあげる。

Zunich は、2歳から5歳の子どもをもつ80名の母親について、その養育態度と実験室での子どもとの相互関係にみられた行動とを比較した。観察による17の母親行動と16の態度スケール(PARI)の相関を求めたが、有意な相関を示したのは544のうち、わずかに16でしかなかったという結果を得ている。¹⁸⁾

他のもうひとつの質問紙を用いた研究は、Brody によって行なわれている。彼は、就学前の幼児とその母親50組を対象に、PARI と MPAS の2つの態度尺度

と遊戯室での相互作用との関係を検証したが、僅かに MPAS の拒否スケールのみが母子の情緒的行動と関連したに過ぎなかったという結果を報告している。¹⁹⁾

この類似した2つの研究からは、親の態度を把握するために態度スケールが有効であることを示すものが得られなかった。この結果について、Lytton は態度についての質問紙と行動観察との比較がもっともだめなものであると評している。

一方、面接については、Smith, Antonovsky, Bing および Douglas らの4研究で論じられている。このうち、面接を適当な方法と結論づけているのが Smith と Douglas らの研究である。

Smith は、面接の資料に対する疑問や批判を認めたくて、面接法の価値を

- 1 過去および現在の母親の態度や行動についてのデータを集めるもっとも経済的な方法である。
- 2 母親と子どもの両行動を比較測定することが可能である。

の二点から評価し、母子の実際の行動についての統制された観察と比較し、面接の適正さを試みる研究を施行している。そのために、彼女は3歳から4歳1か月までの30名の幼児とその母親を対象として、子どもの依存性を変数に用い、観察室での母子の相互作用についての観察結果と母親との面接結果とを比較したが、面接か観察のいずれが実際の母親行動の測定法となり得るかについてを決定する明確な証拠を得ることができなかった。しかし、観察されたと同様の行動が母親によって報告され、しかもそれらの結果が子どもの依存性の先行要因とされたこれまでの研究結果と同じものを得たことから、Smith は面接法は観察法より短時間で行動の幅広い範囲の研究が出来るので望ましい方法であると思われる結論づけている。しかし、“防衛的”な母親は、面接での応答によるよりも、観察事態で容易に識別され得るということも指摘している。²⁰⁾

Douglas らは、1歳から3歳の幼児9名とその母親の家庭における相互作用を観察し、幼児の活動との関連をみようとした生態学的研究を試みたが、その際行った面接と相互作用の相関値を算出している。この面接は、24時間以内のことに限定し、しかも“遊び”とか“世話”とかに費いやした時間を母親の答から引き

出すようにしたものである。母親の報告した“遊び”や“世話”などのカテゴリーは実際に観察したものと大変よく一致したとの結論を得ている。²¹⁾

Bingの研究は、面接の妥当性について直接述べてはいないが、5年生の児童を対象として認知能力と母親の養育行動の関係を調べたが、面接での変数は女兒の認知能力を弁別するという結果を見出した。この結果について彼女は面接は子どもの初期の生育史に関して言及し、観察は現在を示すものであろうと述べ、認知能力は男児では初期に、女兒ではその後に発達するのではないかと説明している。²²⁾

面接について批判的な結果を見出しているのが Antonovsky である。彼女は母親の育児行動と子どもたちの行動とを関連づける理論的仮説の検証と方法論的な問題を検討する目的で、2歳児9名と母親を対象に、組織的な面接と非組織的な面接および観察の3つの資料について比較している。彼女は、両面接は各面接と観察に比し高い一致を示すだろうという仮説と“不安”や“葛藤”のある母親はそうでない母親よりも不一致を多く表わすであろうという仮説を立てた。結果はいずれの仮説も支持されなかった。すなわち、愛情的接触、要求、制限、罰の4つの養育行動についての各データ間の相関を求めたところ、両面接間では.64(要求)から-.33(罰)まで、組織的な面接と観察間では.42(要求)から-.20(制限)まで、非組織的な面接と観察間では.64(愛情的接触)から-.08(制限)までというように、予期に反して低くまた負の相関まで示した。さらに不安や葛藤の関係も見出されなかったと報告している。²³⁾

以上、面接と相互作用の観察のそれぞれの結果を比較した4つの研究の概要を紹介したが、その比較結果はさまざまで、従ってその結論も一義的でない。これらの研究は結論だけでなく、共通の基盤に立った研究とはいいい難いものである。それは4つの研究が対象とした子どもの年齢も異なっていれば、観察の条件、取り上げた変数もさまざまである。さらに面接と観察の時間的継起も一樣でなく、ある研究は面接後に観察し、他の研究は観察を終えてから面接を行なっている。親が予め面接と観察の両方を実施することを知っている場合もあれば、そうでない場合もある。面接の課題も、面接に要する時間も異なる。このように方法論的

に吟味しなければならぬ要因が数多く存する。

Yarrow は、方法に関する問題について「親子関係の心理学的研究には面接や質問紙を通しての質問が強調され、また信頼がおかれているが、これらの方法によって親の変数と子どもの結果との間に、明白な識別を認める関係を期待したならば、われわれは失望するだろう」と述べ、さらにその理由を詳細に挙げている。²⁴⁾ それを略述すると概ね次のようになる。

1 母親の面接には、強く自我が関与する。特に中流やそれ以上のクラスの母親たちにとっては、さまざまな育児書や家庭雑誌を通して、くどくどと指摘されてきた領域についての自己報告であって、面接調査での母親の報告に、これらの影響がどれ程強いものであるか決め得ないで信頼をおくことは出来ない。

2 育児に関する通常の面接は、大変困難な識別力と統合が母親に対して要求される。何年にもわたる母親と子どもの関係や子どもの反応の本質を、われわれは1～2時間で学ぼうと期待し、母親の育児行動を左右する原理を公式化するために質問し、母親の形態的行動を求める。しかし、それらが平均化しようという単純なものではない。その事態や子どもの発達水準によって、また母親の心理的状态などによって、強度や頻度に異なりのあることをどのように考えればよいか。

3 われわれが母親に強いる面接課題についても問題がある。そのひとつは、母親自身および子どもを相対的尺度で判断するよう求めるという事実から生ずる。それは他の母親や子どもたちについての言及を必要とするが、例えば中産階級の母親はそれを専門家の助言を標準として考慮し、労働階級の母親は自分の母親の行動から考えるだろう。

4 面接においては、母親に自分たちの感情や行動および子どもたちの感情や行動について、現在や過去について思い出すことを期待して、それらのデータをすっかり信用して受け入れていることに対する疑問がある。

以上少々長くなったが、方法論的問題についての Yarrow の見解の一端を紹介した。ここに指摘された諸問題を越えて、親子の相互作用を理解しようとして発展してきた直接観察法を用いた研究を次に概観してみよう。

IV 観察的研究の発展と問題

最初に、親子の相互作用に関する観察研究の推移を把握するために、Lytton が挙げている 50 の研究をその公刊年に従い、5 年毎の研究数をまとめたものが table 1 である。1955 年までの初期の段階では、すでに述べたように親子の相互作用

table 1. 親子の相互作用に関する観察研究の推移 (Lytton, 1971 の資料より)

時 期	研究数
～ 1955	4
1956 ～ 1960	8
1961 ～ 1965	13
1966 ～ 1970	25
計	50

table 2. 児童心理学の実証的研究の推移 (Wright, 1960)

時 期	全研究数	観察的研究	
		N	%
1890 ～ 1899	35	3	9
1900 ～ 1909	63	8	13
1910 ～ 1919	48	4	8
1920 ～ 1929	82	3	4
1930 ～ 1939	491	53	11
1940 ～ 1949	328	20	6
1950 ～ 1958	362	19	5
計	1409	110	8

用に関する直接観察の最初のものとしてみられている 1945 年の Baldwin, Kalthorn, Breese によって報告された Fels Study を含め 4 研究をみるに過ぎなかった。当時は Wright のまとめ²⁵⁾ (table 2) にみられるように児童心理学の実証的研究の中でも観察研究そのものが少なかったことにもよるが、親子の関係を主題とした研究の多くも親の養育態度や行動などのように親から子への働きかけを問題とした研究が中心であり、親子の観察研究が僅かであった²⁶⁾ ことは容易に理解できる。このような状態から年を追うに従い等比級数的な増加の過程を示しているが、このことから親子関係の研究が従来の方法についての疑問や批判を越えて新しい方向をめざしたことを明らかにするものといえよう。

ひとくちに親子の相互作用に関する研究といっても、そこにはさまざまな研究が包含されている。例えば再三あげる Baldwin らの研究のように、家庭におけ

る全く非構成的な場面での観察研究から、Hilton の行なった実験室での学習課題の遂行場面における母子の相互作用の観察研究²⁷⁾ まで多様である。従って方法論上の考察を進めるためには、まず刺激や行動に対するコントロール量についての問題を考慮しなければならない。

そこで、観察の行なわれた環境とその事態の構成とにわけて吟味することが必要となる。環境については、親子ともによく慣れた場である自分たちの家庭から、まったく新奇な環境としての実験室での観察までがあり、その中間に幼稚園、保育所、病院などの諸施設での観察が含まれるものと考えられる。さらに実際には、Moss のように家庭と研究所という 2つの環境での観察を含むものもある。²⁸⁾

table 3. 親子の相互作用に関する研究の観察事態
(Lytton, 1971 の資料より)

環 境	構成的	非構成的	構 成 的 非 構 成 的	計
家 庭	6	16	0	22
施 設	7	9	2	18
家庭・施設	1	7	2	10
計	14	32	4	50

table 3 はこのような観察環境について分類したもので、家庭、施設(幼稚園・保育所・研究所・病院・実験室など家庭以外の場)とその両所について考慮したものである。結果は家庭での観察がもっとも多く(44%)、次いで施設での観察(36%)、家庭と施設の両所での観察(20%)という順で観察が行われていることが明らかとなった。

他方、観察事態の構成については実験心理学的研究に近いような刺激や事態を十分統制し、特定の標準化した課題や作業を与えてそこで展開される親子の相互作用を観察したものであるか、あるいは親子ともまったく自由に振舞うことが認められた非組織的な事態での相互作用を観察したものであるかに大別される。例えば、Bee らの研究では、実験室においてブロックで家を造るという問題を課し、その問題解決の過程にみられる母子の相互作用を観察する手続きがとられて

いるが²⁹⁾、Moss と Robson らの研究では家庭でのまったく自然な状態でみられる相互作用の観察が行われている。³⁰⁾

こうした行動や刺激のコントロールに関しても3種に分類した。すなわち観察事態が構成的か非構成的かあるいはその両者を併用したものにまとめ table 3 に示した。それによると非構成的事態での観察が断然多く(64%)、構成的事態での観察がこれに次ぎ(28%)、両者を併用した研究は僅かであった(8%)。

次に実際の観察事態を考えると環境と構成を切り離すことは出来ない。同じ構成であっても家庭における場合と実験室における場合とは親子に与える心理的効果は異なるであろうと思われる。

環境と構成のクロスでみると、家庭—非構成(32%)、施設—非構成(18%)、施設—構成、家庭・施設—非構成(14%)の順となっている。

観察事態としての環境や構成が観察研究の増加に伴って変化してきていることが期待される。table 4 はそうした環境や構成の推移についてまとめたものである。

table 4. 親子の相互作用に関する観察研究事態の推移
(Lytton, 1971 の資料より)

時 期	家 庭	施 設	家 庭 施 設	構成的	非構成的	構 成 的 非 構 成 的
～ 1955	2	1	1	0	4	0
1956 ～ 1960	3	2	3	3	5	0
1961 ～ 1965	4	6	3	3	10	0
1966 ～ 1970	13	9	3	8	13	4

る。table 4 からは特定の環境や構成への志向があるとは認められない。少なくとも1970年までの親子の相互作用に関する観察においては、観察事態のコントロールの問題がまだ十分明らかにされておらず、恐らく研究者の判断に委ねられて観察環境や構成が決定されているものと考えられる。

以上、観察事態に関するこれまでの研究のまとめからいくつかの問題をとりあげてみたい。

これまでの親子の相互作用に関する観察研究の多くは、親子ともにもっともよ

く慣れ親しんでいる家庭において、しかも 特定の刺激を与えない 極く自然な事態のもとで親と子の相互が刺激し合って惹起する行動を把握しようとしてきたことが明らかとなった。このようなアプローチは生態学的方法であり、実験的方法の対極をなすものである。こうした傾向は、Mussen が「発達心理学において最もすばらしく、また 実りの多い最近の傾向の一つは、以前にはもっぱら観察的ならびに統計的な手法によって研究されてきた多くの問題に、実験的研究法が適用拡大されるに至ったことである」と述べていることに³¹⁾ そぐわないものであり、さらに今日の発達心理学や児童心理学がめざしている原因と結果の関係を明らかにする発生機序の説明に、親子の相互作用に関する研究が寄与できるものでないということの意味するのであろうか。確かに親子の相互作用という主題は後述するような多くの問題をそれ自体に内包している。しかし「実験的手法がとり入れられるに従って、そこから新たな問題が生じてきた。それは実験的なアプローチは発達についての全体視野と適切な問題意識を見失いがちだということである。(中略)当初は 鋭い洞察的な仮説に出発しながら、実験的手続の厳密性を維持しようとしたために研究目的からはずれたり、緻密な実験を行ないながら、その結論が発達的には全く魅力に欠ける研究がある」という村田の見解³²⁾ に接するとき、ますます自然観察による研究が重ねられるだろう。

一方、生態学的方法から実験心理学的な方法の極に近い方法すなわち何らかの統制が加えられた事態での観察についても多くの問題が存する。特に実験室事態での把握が日常の家庭での生活と異なるのではないかという疑問である。上述の村田の指摘もそうした問題を含んでのことであろう。Smith が「適当に統制されたときの行動観察は、行動の首尾一貫性を示し、特定の状況のもとでの実際の行動に関するデータを与えることができる。しかし、その場合でも統制された状況と自然な家庭環境との間の関係やそうした状況での母親の行動に関する信頼性の問題を含んでいる」と指摘し、Lytton も多くの研究報告を分析したうえで「統制された観察は、すべての被験者にとって、やはり不変性を持続するであろうが、自然状況における家庭とは異なるであろう」と述べ、その詳細についても討究し

ている。従ってこゝで再びそれらを取り上げるつもりはないが、先述した質問紙や面接についての検討では親子の相互作用という主題を通して、観察法と比較した研究をいくつか挙げる事ができた。しかるに観察法におけるコントロール量の相異に関する問題を扱った研究は殆んど見出し得ない。僅かに O'Rourke と Moustakas らの研究をみるに過ぎない。O'Rourke は15歳から17歳の青年とその両親を対象にし、家庭と実験室の両所で、与えられた課題について討論を要請して家族構造に関する相互作用とともに両観察環境についての比較を試みている。そして家庭と実験室の間で家族の相互作用に相異があることを見出している。³³⁾しかしこのような条件のもとでの研究結果が必ずしも一般的な親子の相互作用に関する研究には適用できないであろう。他方、Moustakas らは親やセラピストらとの相互作用を客観的に記録するための手続きを検討し、家庭と遊戯室で活用できるスケジュールを示したがそれによって両所の観察結果すなわち相互作用の結果に相違のみられることを示唆している。³⁴⁾

また、観察の環境が家庭であれ実験室であれ、構成的、非構成的を問わず観察者が存在する。観察者が親および子にどのような効果をどの程度与え、親子の相互作用がどう変容するかについてもまだ実証的に検討されていない。

このような問題を解決するために自然的事態での相互作用のサンプルを見出し、それをコントロールされた事態で研究することが必要であろう。Bell の指摘する³⁵⁾ 事態をいろいろな程度にさまざまな方法でコントロールした研究がなされるためには、親子の相互作用を研究する者がより多く共通の基盤を持たなければならないであろう。

観察研究が年々急速な増加を示していることはすでにみた通りであるが、先に述べた初期経験や初期行動に対する近年の関心からすれば、親子の相互作用に関する研究の対象となる子どもたちも乳幼児を中心にすゝめられることが考えられる。Lytton がとり上げている研究で最も低い年齢は Baldwin らや Robson らなど³⁶⁾ の14研究 (28%) が0歳児を対象に含んでおり、最も高い年齢は先に紹介した O'Rourke の研究などの17歳の青年を対象に含んだ3研究 (6%) である。

各研究の対象児を学齢前の乳幼児期（6歳まで）、学童期（7歳から12歳）、青年期（13歳以上）の3年齢段階にわけ、各年代毎にまとめたものが table 5 である。この結果によれば年々乳幼児期の子どもを対象にした研究が多くなっていることが判明する。

table 5. 親子の相互作用に関する研究対象児の年令推移
(Lytton, 1971 の資料より)

時 期	幼児期	児童期	青年期	幼児期 児童期	児童期 青年期	幼児期 児童期 青年期	不 詳
～ 1955	1			2	1		
1956 ～ 1960	5	1	1				1
1961 ～ 1965	9	2	1	1			
1966 ～ 1970	20	1	1			2	1
計	35	4	3	3	1	2	2

table 6. 親子の相互作用に関する研究の対象児と観察事態の関係
(Lytton, 1971 の資料より)

	家 庭		施 設			家庭・施設			計
	構成的	非構成的	構成的	非構成的	構成的	構成的	非構成的		
幼 児 期	2	10			2				35
児 童 期	3		1						4
青 年 期	1		1			1			3
幼 児 期 児 童 期		3							3
児 童 期 青 年 期		1							1
幼 児 期 児 童 期		1	1						2
不 詳		1					1		2
計	6	16	7	9	2	1	7	2	50

次に table 6 は、観察事態が対象児の年齢によって特定されるのではないかと

いう観点からとりまとめた結果である。環境については乳幼児を対象とした研究35のうち、家庭での観察が12研究(34.3%)と意外に少なく、逆に施設での観察研究が15(42.9%)もあり家庭での観察を上回り、家庭・施設の併用が8研究(22.8%)となっている。

一方構成の面では、学童期や青年期のみを対象とした7研究がいずれも構成的事態で観察が行われているのに対し、乳幼児期を対象にした研究では35の研究のうち25(71.4%)が非構成で観察を行っており、構成された観察は6研究(17.1%)に過ぎない。

乳幼児期の環境と構成のクロスでみると、家庭—非構成が10研究(28.6%)、施設—非構成が9研究(25.7%)で拮抗し、次いで家庭・施設—非構成の6研究(17.1%)となっている。

このような観察事態と対象児年齢との関係について簡単な考察をすれば、親と乳幼児の相互作用で観察し測定する変数が多様で、それと関連して観察事態もさまざまにとられているものと考えられる。Lyttonによれば、家庭では援助・応諾・指示・制限などの変数が多く扱われている。これらと異なる変数を扱う場合、家庭での変化に富んだ刺激を制限し、特に自由あそびにみられる相互作用などが遊戯室や観察室で行われている。施設での観察は子どもの移動などについても比較的容易に測定でき(Koganらは床に区劃を入れて位置と移動を測定するように工夫している³⁷⁾、さらに観察のために適した設備や機器の使用も容易であることなどの要件が相互作用の観察事態を決定する際に考慮されるものと思われる。

親と学童や青年の相互作用の観察については、彼らの範囲の広い行動を観察することの困難さから、知的課題の達成や与えられたテーマについての親子の討論を通して相互作用が観察されるよう構成された事態が用いられている。

V む す び

近年、心理学や教育学の分野で活発に論議されている初期経験や初期行動の研

究に刺激され、親子の相互作用に焦点をあてた組織的な研究が数多く報告されるようになった。それらの研究は一様に、親子特に乳幼児期における母子間の相互作用がその後の発達や行動に決定的で重要な影響を与えるものであることを強調している。しかし、親子の相互作用に関する研究に課せられた因果関係、すなわち発生機序についての説明にはまだ研究者間で一致した見解をみるまでには至っておらず、それぞれ異った説明概念が用いられている。このことは親子の相互作用という概念そのものが多義的であるだけでなく、研究方法も多様で取扱う変数の種類やその時期の特定が困難であるため、研究者それぞれが互いに共通の基盤に立って研究しその成果について論議されていないことにもよる。Yarrow が「親子関係における研究は、方法論が模範的であるというようなそして実証が確固として不変であるというような領域のようには思われない。しかし、もっとも批判的あるいは絶望的であっても、この領域は行動的あるいは発達の理論上とるに足りないものとして棄てることはできない」と述べているが、このような状態にいつまでも留まっているわけにはいかないであろう。

本研究は Lytton が先に行なった親子の相互作用に関する観察研究についてのレビューをもとに、親子の相互作用研究の方法的基盤を求める何らかの手がかりを得たいと、まずその形態的な面についての分析を試みた。

研究の必要性やこゝにみた研究の推移からも、今後さらに多くの研究特に乳幼児を対象とした研究が行われるであろうが、より基礎的な研究例えば相互作用に及ぼすコントロールや観察者の存在が与える影響などについての十分な検討を含む研究を考慮しなければ、引続き共通の基盤を欠く研究を重ねるだけで発達や行動理解のために貢献できるものとはならないであろうと思われる。

勿論、本研究でとり上げた問題は親子の相互作用研究の極く一部分であり、他の主要な問題である測定変数、観察時間および回数、記録とその処理さらには結果などについても検討を急がなければならないであろう。今回は不本意ながら Lytton の挙げた研究のすべてを入手することができず、これらの問題に立ち入ることができなかった。今後引続き、Lytton 以後のより新しい研究をも含め親

子の相互作用に関する研究の方法的モデルの探索に努力すべきことを痛感した。

引用文献

- 1) 藤永 保 発達研究の諸問題 桂 広介他(監) 岡本夏木他(編) 児童心理学講座
1 成長と発達 第2章 金子書房 昭和50 79
- 2) 藤田 統 動物における初期経験の研究と問題点 異常行動研究会(編) 初期経験
と初期行動 1章 誠信書房 1977 3-5
- 3) Cranford, P. G. *Disciplining Your Child. The Practical Way.* Prentice-Hall
1958 25
- 4) Guntrip, H. *Psychoanalytic Theory, Therapy, and the Self.* Basic Books,
Inc. 1973 3
- 5) 原 正隆 トリの刻印づけの研究 異常行動研究会(編) 初期経験と初期行動 7
章 誠信書房 1977 165
- 6) Hess, E. H. 太田次郎(訳) カモにみる親子のきずな サイエンス 1972, 10.
日本経済新聞社 1972 104-112
- 7) 高橋たまき 人間における初期経験の研究と問題点 異常行動研究会(編) 初期経験
と初期行動 2章 誠信書房 1977 63
- 8) Hebb, D. O. 白井 常(訳) 行動の機構 岩波書店 1957
- 9) Portmann, A. 高木正孝(訳) 人間はどこまで動物か 岩波新書 岩波書店 1961
- 10) Bowlby, J. 黒田実郎 他(訳) 母子関係の理論 1 愛着行動 岩崎学術出版社
1977 268
- 11) Bowlby, J. 黒田実郎(訳) 乳幼児の精神衛生 岩崎学術出版社 1972
- 12) 伊藤則博 親と子どもの出会い 諏訪 望・三宅和夫(編) 乳幼児の発達と精神衛
生 第2章 川島書店 1976 29
- 13) 三宅和夫 増補 児童発達心理学 川島書店 1975 28
- 14) 村尾能成 人間の親子関係と行動異常 異常行動研究会(編) 初期経験と初期行動
4章 誠信書房 1977 104-105
- 15) 三宅和夫 前掲書 35-36
- 16) Baldwin, A. L., Kalhorn, J., & Breese, F. H. *Patterns of parent behavior.*
Psychological Monographs, 58 3 Whole No. 268 1945
- 17) Lytton, H. *Observation studies of parent-child interaction : a methodological
review.* *Child Development*, 42 1971 651-684
- 18) Zunich, M. *A study of relationships between child rearing attitudes and*

- maternal behavior. *Journal of Experimental Education*, 30 1961 231-241
- 19) Brody, G. F. Relationship between maternal attitudes and behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 2 1965 317-323
 - 20) Smith, H. T. A comparison of interview and observation methods of maternal behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 57 1958 278-282
 - 21) Douglas, J. W. B., Lawson, A., & Cooper, J. E. Family interaction and the activities of young children. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 9 1968 157-171
 - 22) Bing, E. Effect of child rearing practices on development of differential cognitive abilities. *Child Development*, 34 1963 631-648
 - 23) Antonovsky, H. F. A contribution to research in the area of the mother-child relationship. *Child Development*, 30 1959 37-51
 - 24) Yarrow, M. R. Problems of methods in parent-child research. *Child Development*, 34 1963 215-226
 - 25) Wright, H. F. Observational child study. In P. H. Mussen (Ed.) *Handbook of research methods in child development*, Wiley 1960 71-139
 - 26) Hoffman, L. W., & Lippitt, R. The measurement of family life variables. In P. H. Mussen (Ed.) *Handbook of research methods in child development*, Wiley, 1960 945-1013
 - 27) Hilton, I. Differences in the behavior of mothers towards their first-and later-born children. *Journal of Personality and Social Psychology*, 7 1967 282-290
 - 28) Moss, H. A. Methodological issues in studying mother-infant interactions. *American Journal of Orthopsychiatry*, 35 1965 482-486
 - 29) Bee, H. L., Van Egeren, L. F., Streissguth, A. P., Nyman, B. A., & Leckie, M. S. Social class differences in maternal teaching strategies and speech patterns. *Developmental Psychology*, 1 1969 726-734
 - 30) Moss, H. A., & Robson, K. S. Maternal influences in early social visual behavior. *Child Development*, 39, 1968 401-408
 - 31) Mussen, P. H, 今田 恵 (訳) 児童心理学 現代心理学入門 1 岩波書店 1968 10
 - 32) 村田孝次 発達心理学的方法 八木晃 (編) 心理学研究法 1 方法論 IV 東京大学出版会 1975 130
 - 33) O'Rourke, J. F. Field and laboratory: the decision-making behavior of

- family groups in two experimental conditions. *Sociometry*, 26 1963 422-435
- 34) Moustakas, C. E., Sigel, I. E., & Schalock, M. D. An objective method for the measurement and analysis of child-adult interaction. *Child Development*, 27 1956 109-134
- 35) Bell, R. Q. Structuring parent-child interaction situations for direct observations. *Child Development*, 35 1964 1009-1020
- 36) Robson, K. S., Pedersen, F. A., & Moss, M. A. Developmental observations of diadic gazing in relation to the fear of strangers and social approach behavior. *Child Development*, 40 1969 619-627
- 37) Kogan, K., Wimberger, H. C., & Bobbitt, R. A. Analysis of mother-child interaction in young mental retardates. *Child Development* 40 1969 799-812